

# 肢体不自由特別支援学校における写真を用いた学習評価

## ～中学部の教科教育実践を通して～

学籍番号	229127
氏名	箕輪 賢佑
主指導教員	森田 英嗣
副指導教員	佐々木 靖

### 1. 実践課題研究の背景と本校の課題

特別支援学校中学部では、新学習指導要領が2020年度に完全実施となった。学習状況を分析的に捉える観点別学習状況の評価として、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点が示された。本校においても新学習指導要領に対応した観点別評価を実施する流れとなった。

本校の教育活動は、自立活動の時間における指導と教科の指導の大きく二つに分けることができる。教科の指導に関しては学習内容や評価など、全てを教科の主に者に委ねられているため、学習記録や評価のための資料が統一されていない。教科教育の学習評価に対するエビデンスが残ら無いことと、教科の学習活動に関する引継ぎ資料が無いという2つの課題が考えられた。

### 2. 写真を用いた学習評価について

本校は肢体不自由特別支援学校のため、筆記テストや記述による課題を課すことは容易ではない。そこで、撮影するポイントを決めて写真で学習を記録し、写真を用いた学習評価を行うことを考案した。担任が学習評価と個別の指導計画を見比べることで、写真を用いた学習評価の「信頼性」と「妥当性」を確保することとした。(以下「写真評価」とする。)

### 3. 基本学校実習について

「写真評価」を行うにあたり、G. ウィギンズ・J. マクタイ (2012) の「逆向き設計」の理論と方法を用いた授業づくりを行った。一人ひとりの生徒の指導目標を設定し、「写真評価」の「信頼性」と「妥当性」を検証した。発展課題実習に向けて、「写真評価」の方法について、中学部教員と共有できる資料を作成した。

## 4. 発展課題実習について

### 【目的】

組織として「写真評価」の実施を行い、その実用性の検証を行うことであった。各教科の学習活動を写真として記録し、教科の特性に関係なく「写真評価」を実施できるか検証した。

### 【方法、「写真評価」の実用性の検証，構造化インタビューの方法と分析】

2023年度の1学期に「写真評価」を中学部組織として実施後、国語、数学、理科、社会、体育、音楽、美術、家庭科の8教科8名に対して質問項目をプリント配布し、質問項目に沿って構造化インタビューを実施した（英語と技術の教員にはインタビュー未実施）。時間は質問対象者それぞれ約20分行った。国語と数学の教員は新転任者であり、2022年度に実施した「写真評価」の研修を受講していない。

### 【結果】

逐語録から「写真評価」に関する各教科の語りを分析することで、撮影場面において〔目標に準拠した撮影〕と〔学習活動に注目した撮影〕の2つのグループに分けることができた。〔学習活動に注目した撮影〕を実施したのは、2022年度に実施した研修を受講していない新転任教員（パターンC）であった。さらに、〔目標に準拠した撮影〕を実施した教員の学習評価において、〔写真を評価に使用する〕教員（パターンA）と、〔写真を評価しない〕教員（パターンB）に分けることができた。図1に概念図を示す。

### 【考察】

(1) パターンCの新転任教員は、生徒一人ひとりの学習を画像で記録することの目的を意識することなく、各々の基準で撮影する場面を考えたため、生徒全員の学習の様子を撮ることが目的となってしまった。パターンAは、〔学習活動に注目した撮影〕ではなく、個々の〔目標に準拠した撮影〕を行うことで、

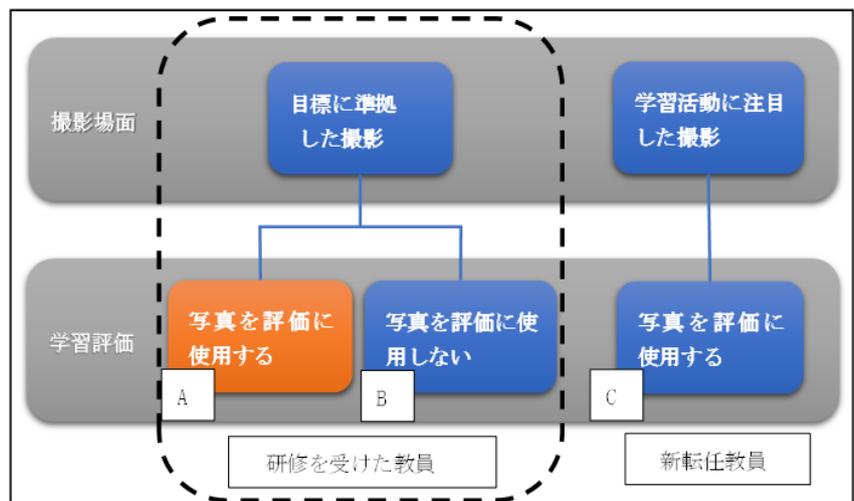


図1. 概念図

エビデンスに基づいた学習評価を行うことができた。

(2) パターンAとパターンBの教員は研修を受講しているため、〔目標に準拠した撮影〕を実施している点について共通していた。ただし、学習評価に写真を使用するかについては意見が分かれた。パターンAは、普段記録しているメモに加えて学習を写真として記録することで、エビデンスに基づいたより質の高い学習評価を実施することができた。

(3) パターンA(研修を受講した教員)は、〔目標に準拠した撮影〕から学習を写真として記録し、エビデンスに基づいて形成的評価を行い、そこから総括的評価を実施することができた。(1)、(2)の考察から、「写真評価」はエビデンスに基づいた学習評価であり、各教科の学習評価の質を向上させることが可能な、実用性がある学習評価であることがわかった。